
仮面ライダーバグロス

イマジンカイザー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーバグロス

【Nコード】

N1052M

【作者名】

イマジンカイザー

【あらすじ】

太陽から照射された熱光波「ゼノニウム・フレア」によって、人類の約半数は一瞬にして消滅。わずかに生き残った人間も、人としての形状を保ちきれなくなり…。科学者「はちくじようすけ八九寺洋介」は「仮面ライダー」に変身し、世界を――

（パイロット版）第一話：「人類消滅」

—— はあ、はあ、はあ ——

—— ダメ……っ、もう、走れない ——

—— 「ふええっ…ええええん」

—— ああ、っ。泣かないで坊や。おねがい。泣かないで ——

—— あいつらが、あいつらがこっちに気づいちゃう…、おねがい、泣きやんで ——

—— 「ええええん…びええええん」

—— おねがい、泣かないで、おねがい！ ——

—— 「びええええええ…くう…う」

—— ごめんね、坊や。でも、泣きやんでくれないあなたが悪いのよ。

—— ごめんなさいね。でも大丈夫、子どもなら、また産めば……

ぐるるるるる。がああああああっ！

—— え……っ！？

—— おお、どうだった？今日の収穫は？

—— ぼちぼちだ。まあ今日明日喰ってく分には十分だろ。

——俺なんてすげえぜ。たわわに実った”雌羊”だ。
やらけえししつとりとした口当たりでうまいのなんのって。
つつい中のモンまで喰っちまった。

あれはあれで軟骨の食感がたまんねえんだって。

——それはいいが、お前の手に持つてる、それはなんだ？

——筋張って食べたもんじゃないが、乾燥させりゃあ非常食になるって思ってよ。

な、これ持って帰るからよ、一人占めしたことは許してくれるだろう？な！

——仕方がねえな。今回だけだぞ。

——しかし、”首筋”にアザがあるぜ、こいつ。

”口減らし”でもしたかったのかねえ。はははは。

~~~~~

2020年、5月28日、午後1時53分23秒。

太陽から放たれた未知の紫外熱線「ゼノニウム・フレア」。

未知の放射熱線は世界中に点在する原子炉に対し、  
炉心融解を誘発させ、その全てを消失させました。

地球の約6割は焦土と化し、人類総人口中の約30億人強が一瞬で  
死滅。

それから少しずつ時間をかけて、さらに5億人が亡くなりました。

死んだ人間たちも辛かったでしょう。

しかし、生き残った人間たちの未来もまた、絶望的でした。

このお話は、”ゼノニウム・フレア”による世界的な大災害、そのちよつど”5年後”の同じ日から、はじまります。

~~~~~

「腹が…減った」

見渡す限り何もない荒涼な荒れ地のまっただ中。

赤黒く薄汚れたヘルメットを被り、灰色に汚れた白衣を身に纏った一人の男が、

ハンドルの長い大型のオートバイを駆り、あてもなく走り続けた。

「参った…な。日記によると、もう”半月”も飲まず食わず、か。

……手持ちのもので口に入れられそうなものと言えば、万年筆の中の黒インキだけ、か。…できれば御免被りたい」

男は長い間、何も口に入れていなかった。

ご飯が欲しい。肉が欲しい、水が欲しい。

だが、彼の目の前にあるのは終わりの見えない荒れ地と、ぼろぼろになった人の衣服と、汚らしい雑草だけ。

走れども走れども、人はおろか食べ物配すら見受けられない。

「このままここで死ぬ、か。自分のこととはいえ、あつけないものだ。

……うう、む？」

そんな中、男ははるか遠方に何かを見込む。
数人の男が、誰かを集団で追いまわしているようだ。

「助かった。なんだか知らないが助かった。飯にありつける」

男はバイクのエンジンを強く回して回転数を上げ、
そちらの方へと近づいた。だが、その集団はと言うと…、

「へっへっへ。さあさ、お嬢さん。その紙袋をこちらに渡しなよ」
「あんたが持つてる紙袋の中身、それさ、”コンビーフ”の缶詰だ
ろ？」

「いいよなあ。このご時世で缶詰なあ、いいよなあ」

「えっ！？なんで、そんな…」

「ああああ、皆まで言うな。俺たちや「鼻」が利くからよ。
喰いもんなんざ中身を見なくなつて一発で分からあ。」

「やめて、やめてください！子どもが…子どもが待っているんです、
後生です、見逃して下さい」

「だめだめ。俺たちだつて腹が減ってるの。わかる？」

「そんな事情、ひとりひとり聞いてたつてしゃあないでしょ？」

「ここはその、”運が悪かった”と思って」

数人の男たちは、茶色い紙袋を抱えた妙齡の女性を取り囲み、
数と言葉の暴力と強迫で、彼女から紙袋の中身を奪い取ろうとして
いた。

この様子に落胆したのは、先ほどの白衣の男だ。

「あああ。なんということだ。…喜び勇んで来てみれば、こんな」

男は空腹と落胆の余り、バランスを崩してバイクから転落。

そのまま地面をずさーっと滑り続け、

運悪く、女性を取り囲む『四人の』男たちの中に入り込んでしまった。

「ああ？なんだ、おっさん」

「何？正義の味方にでもなりたいの？そういうガラでもないでしょう？」

「えっ…えっ？い、いやあゝ、どうですかねえ」

——首を突っ込む気なんて、なかったのですが。

男はしまったと心の中で舌打ちをし、ヘルメットを脱いで周囲を見まわす。

うだるような日差しにそぐわない不健康そうな白い肌に、

整っていないぼさぼさの髪に、不格好な無精ひげ。

四人の男は含み笑いのまま、男に言葉を返した。

「ま、いいけどさ。邪魔はしないでよね。ほら、どいたどいた」

「お願いします旅のお方、子どもが待ってるんです。助けてください」

男たちには”どけ”、女性には”助けて”。

自分は空腹で、指一本動かすのも一苦労なこの状況。

男はかけている紫色の趣味の悪いサングラスを右手でいじって思案する。

「はてさて、どうするべきか」

——旅は道連れ世は情け。しょうがないか。

男は手や足を砂に吞まれながらも何とか立ち上がり、目の前の男たちに向かって声を上げた。

「こらこらこら。待ちなさいって。よくないですよ、そういつことは。」

このご時世、奪い合うより助けあわなくっちゃ」

「はあ？何言ってるの？オジサンさあ」

「助け合ってるんだってんだ。こちら」半日”何も喰ってねえんだよ！

腹が減って減ってしょうがねえんだよ」

「半日が何です半日が。私なんか”半月”ですよ半月。人を襲ってストレス解消したいんなら、私が相手になってあげますよ」

「はあ？」

「何言ってるの、おっさん」

「見てわからない？この状況」

邪魔をするなと目で威嚇する男たち。

だが彼らの威嚇に臆することなく、男は飄々とした態度で返す。

「いやね、分かります。分かりますけどね。」

何人もの男が寄ってたかって一人の女性を襲うのって、良心が痛まないのかなあと、思ったわけですね。うん」

「うるさいなあ。何様のつもり？」

「ああ、そうですね。自己紹介が遅れましたね。

私は”八九寺^{はちくじ} 洋介^{ようすけ}”。科学者のはしくれです。

科学者って言っても、このご時世そんな肩書に意味はありませんが」

男はポケットの中に入っていた名刺入れから取り出し、彼らの一人に手渡した。

肩書に”学者”との文字が躍って入るものの、印刷がにじんでいて、何の『学者』なのかはうかがい知ることが出来ない。

と言うよりも、男たちは彼の肩書になど最初から興味がなかったらしく、

彼の名前の部分だけを流し読みして地面に投げ捨てた。

「あんたの経歴なんてどうでもいいんだよ。

ごちゃごちゃ言っていると、あんたも”噛む”ぜ」

「ああ、噛んじゃうぜエ」

「噛んじゃうよ？噛んじゃうってばオ」

—— おおおおおっ！

男たちは皆、天を仰いで”吠えた”。

すると、彼の口から”牙”が生え、鼻が尖って突き上がり、

ごきごきと嫌な音を立てながら耳が頭の上にせり上がってゆく。

全身が赤茶色の体毛に包まれ、

獣のような姿に『変身』するまで、1分もかからなかった。

科学者・八九寺洋介は、複数体の獣に取り囲まれてしまう。だが、洋介は臆するどころか、眉一つ動かさず彼らを見据えた。

「なるほど。君たちは”犬”と融合したわけですか。
じゃあ、ま。言っても分からないようですし、いっちょもんでやる
と、しますかね」

そうつぶやいた瞬間、彼の周囲の雰囲気 がらつと、
飄々としたものが冷淡なものへと変わった。

洋介は身につけた白衣の内ポケットをこそそと探り、
『”蜂”の装飾がついたバツクル』を取り出して、腹部に押し当て
た。

ズボンのベルトの上から伸びてゆくそれは、彼の背面で連結し、
一つの”ベルト”となる。

「なんだ、ありや」

「何だそりや」

獣と化した男たちのうち一人が、臭い息をもうもうと吐きつつ尋ね
る。

洋介はやや不機嫌そうな表情でふん、と鼻を鳴らして答えた。

「”仮面ライダー”のベルト。知りませんか？

君たちのお父さんが子どものころにテレビで放送されていた、はず
ですが」

「知るか」

「そんなに死にたきゃ、お前から死んじまえ」

——るおおおおおおお！

獣たちは一吼えすると、一斉に洋介に飛びかかった。

「人の話は最後まで聞くものですよ。まったく」

洋介はふう、と一息つく、胸の前で両手を×の字に組み、それをぐるりと回転させ、腹部の前に持ってきて、かつと目を見開いて一言つぶやいた。

——『変身』。

「な、なんだッ」

「うおっ、まぶしっ」

蜂の装飾の入ったバックルが光り輝いたかと思うと、胸、腕、足、顔の順番に、彼の体に何かの装甲が纏われてゆく。光が収まると、彼らの目の前には、

全身に黄色い装甲を身に纏い、

スキーゴーグルのような形の赤い複眼に、

”蜂”のようなメカを頭に乗せた、

いかにもテレビの特撮作品に出て来そうなヒーローが立っていた。

「さあて、諸君。”特別講義”の時間だ。かかってきたまえ」

「な、なんだか知らないが、やつちまえ！」

”仮面ライダー”に変身した洋介は、後ろ手をちよいちよいと振って、相手を挑発。

空腹に耐えかね、洋介の態度に腹を立てた獣の集団は、彼を取り囲み、自慢の牙と爪で襲いかかってきた。

「男のかつたい肉なんざ喰いたくねえがよ、これも天命だと思つてあきらめなア！」

「男の肉…ねえ。私も嫌いだ。それに、食料扱いされるのは、もつと嫌いだ」

獣の爪が洋介の右肩に突き刺さらんとしたまさにその時。

洋介は獣の着ている服の左襟と右袖を掴み、

右足を軸にして左足を強く踏み込んで回転し、『一本背負い』を見舞った。

獣は美しい曲線を描いて地に伏し、背中を強く打って一瞬気を失った。

「人間の急所は、一般的に首の側面や後ろ、手首辺りが一般的だね。だが『胸部』には”心臓”と”肺”、人体にとって重要な器官が二つも並んでいる。

一発で二個分とは、ずいぶんおいしい話だとは思わないかな？
そう、こんな風に」

瞬間、洋介は彼の胸元を右足で踏みつけ、めきめきと嫌な音が立つぐらいの力を込めて、獣の胸を『踏み碎いた』。

獣は断末魔を上げる暇すらなく、胸と口から噴水のように血を吐いて事切れた。

「な、何しやがったんだッ」

「よくも、よくもアキラを！」

洋介は無表情な仮面の中でため息をひとつ吐き、答える。

「なんでも何も…君たちが齒向かったんでしょうが。」

さっ、とつとと退散することをお勧めしますよ。

私としても”仮面ライダー”という名前に傷をつけたくないですし」

洋介はさもめんどくさそうな口調と態度で残る三人の獣に退去を命じる。

が、直情的かつ空腹に支配された獣が、

あまつさえ仲間を殺した男の言うことなど、聞くはずもなかった。

「ふ、ふざけやがって！ぶっ殺すッ」

「アキラの弔いだ」

「てめえの血で墓場を染めてやるぜ」

三人の獣は目にも止まらぬ速さで洋介を円形に囲い込み、彼の死角を突いて鋭い爪で洋介の体を切り裂いた。

洋介も寸でのところ、急所をかわして反撃しようとするが、

重い装甲に加えて、目の前の獣以上の空腹により、

一人ひとりを捉えて攻撃することは適わなかった。

「まったく…うつとおしいねえ。こっちも腹が減ってしょうがないんだが」

「んなこと知るかッ、くたばれっ！」

だが、彼らがやろうとしていたのはそれだけではない。

二人の獣が洋介の両腕を押さえ込んで自由を奪うと、

残りの一人が背後から、洋介の右足首に噛みついたのだ。

噛みついたひとりが、両腕を押さえ込む二人が、

勝ち誇ったかのようにいやらしい笑いを浮かべて言う。

「はっは、はっはっはッ！死んだ、死んだぜてめえ！
知ってるか？」狂犬病”って病気をよオ！」

「水が怖くて怖くてたまらなくなつて、呼吸困難で死んじまう病気
さア！」

「しかも致死率はギネス級だぜエ！？治療法は……」

「かかる前にワクチンの接種、でしたね。発症後の治療法はなし、
と。」

困りましたねえ。実に厄介だ。この病気も、そんなものを体内に飼
つてゐるあなたがたも。

私もまだ死にたくはありませんし。仕方ない。高温殺菌でも、しま
すかね」

だが洋介は、命に関わる危機に面したというのにもかかわらず、
今自分の置かれた状況を冷静に分析し、

——ふうん！はあああああああッ！

両の拳を握りしめ、大地を踏みしめて気合を入れた。

鎧の中に仕舞われた彼の”筋肉”がむくむくと膨れ上がり、

今まで黄色だった彼の体を覆う外装は鮮やかなオレンジ色に変色。

装甲のいたるところに備え付けられた排気口が解放され、

彼の周囲を熱気ともうもうとした蒸気が包んだ。

「なんだ…なんなんだっ！」

「熱い…熱過ぎる…ッ！」

「この服、脱いでいいかな」

「110…120…1…30…ッ。……そろそろ、いいかな。
やあ、お待たせしたね諸君。君たちご自慢の狂犬病ウイルスは、

私が今、体内で全部『死滅』させて差し上げたよ。
ギネス級の致死率も大したことはないね」

「な、なんだとッ！」

「そんな馬鹿な！あるわけねえ！」

「お前エ、見せかけだけで本当は超ビビってるな？そつだろ！」

「どうかな？やってみせようか？」

「や、やってやらあ！るうおおおおおっ！」

獣のうち一人が激情に駆られ、牙を剥いて飛びかかる。
それをよけようとせず、真正面から受け止める洋介。
結果、洋介は鋭い爪で右胸を引き裂かれ、
鉄板すら噛み砕く強力な顎に砕かれた、はずであった。

しかし洋介は痛みも持たず、眉ひとつ動かそうとはせず、
自分に噛みつく獣に対し、穏やかな口調で言葉を返した。

「さあ、存分に味わいたまえ。…味わうことすら、出来なくなっ
たかな？」

「あ、熱い！あつい！あ…ふ……え……っ……………」

彼の”熱い”という表現は適切ではないのかもしれない。

何故なら彼の爪は、彼の牙は、彼の舌は、

月並みな言葉では形容しきれないほどの熱によって、
跡形もなく”溶かされて”しまっていたからだ。

洋介に飛びかかった獣は戦意どころか剥く牙も向ける爪もなくし、
戦意と声をなくして、力なくその場に倒れ込んでしまった。

「君たちはさしずめ”狂犬人間”とでも言ったところかな。犬の嗅覚と脚力、ついでに顎の力に鋭利な爪と牙を得た、って所だろう。」

その上、”狂犬病ウイルス”を体内で精製して、平然としていられるオマケつき、か」

「な、なんだってんだよ。それがどうした」

「君たちは知っているかい？」ミツバチ”という生き物のことを。花の周りをぶんぶん飛び回り、我々にはちみつを与える、あのミツバチだ。

毒針を一回使えば死んでしまっし、そもそも毒素はスズメバチの半分以下。

そんな生き物がよくもまあ、今まで生き残れたものだと思わないか？不思議だろう？

答えは簡単だ。彼らにだって”武器”があつたのさ。それもとびきのやつが。

ミツバチってのはね、羽をたたんで筋肉を収縮させることで、そこから”熱”を発生させ、集団でスズメバチを覆い尽くすことで彼らを”蒸し殺す”ことができるんだよ。どうだい、すごいだろう？」

「だから、なんでそんなことを……………」

獣は気付いた。これから洋介が何をするのかを。そして、彼が一体”何なのか”を。

「私は君たちみたいな爪も牙も顎の力もない。」

格闘技はかじった程度で、格闘家でもありやあしない。だがね、私はその”力”をこの鎧で圧縮し、増幅することができるんだ」

洋介は、ベルトの左側についている”ハチの毒針”のような形状の道具を、

『メリケンサック』のように握って、右拳にセット。

真っ白の”毒針”は洋介が発する”熱”で真っ赤に染まり、毒針の下部に取り付けられたランプが激しく発光を繰り返した。

「あとはまあ、分かるよね。じゃあ、そういうことだから」

「まっ、まっ、待ってくれ！なんで！なんでだ！

どうして、どうしてなんだよ！？なんで、そこまで……」

「”犬”にふさわしい往生際の悪さだね。

何度も言っただろう。やり始めたのは、君たちだよ」

——はあッ！！

洋介は獣の首を鷲掴みにして動きを封じ、

”毒針”を獣の腹部に力を込めて突き刺した。

風邪を引いて熱を出した時を思い出してほしい。

人間はインフルエンザ菌などを殺すために熱を出すか、あれは他の細胞を殺さない温度の最低ラインである。

しかし、洋介の放射する熱は130度かそれ以上を余裕で叩きだす。それを直接体内に受けた生き物が、無事で済むはずなどなかった。

獣は苦悶に顔を歪ませ、声にならないうめき声を上げ、

全身を薄気味の悪い紫色に染めて事切れた。

洋介は”毒針”を獣の腹部から引き抜き、ベルトのバックルについた”蜂の紋章”を押して、変身を解除。 ”毒針”は洋介の発した熱に耐えきれず、下部のランプやメーター部を残し、

どろどろに溶けてなくなった。

「ああ、ああ。貴重な”ニードルブラスト”を一つ……。こう毎回どろどろに溶かしてしまつては直し切れない。もっと改良しないと……」

洋介が溶けてしまった毒針について思案を巡らせていると、物陰に隠れていた妙齡の女性が気恥ずかしそうに、

もじもじとしながら話しかけてきた。
くせの強いもこもことした髪質が目を引く、そこそこ綺麗な女性だった。

「あの…ありがとうございました」

「いえいえ。旅は道連れ世は情けというやつです。

ああ、ああ。缶詰は大丈夫です。食い扶持なら自分で見つけますから」

「いや、そうではなくて…。

旅人さん、”バイク”をお持ち、なんですよね？

助けてもらつておいてぶしつけなお願いなんですけれど、私の住む町まで、乗せていってもらえませんか？」

——そりゃあいい。こっちとしても好都合だ。

「構いませんよ。その方がこつちとしても都合がよいかもしれませんね。」

一人乗り専用なので、少しお尻が痛くなるかもしれませんが」

「ありがとうございます。では失礼して……」

「あ、いや。ちょっと待ってください」

洋介は左掌で、自分に近づかぬよう彼女に促し、

何を考えているのか、その場にゆっくりと腰かけ、大の字に寝てしまったのだ。

「……あの。何をやっているんですか？」

「放熱がまだ十分じゃないんですよ。」

熱がこもっちゃってこもっちゃって。もう後……10分ほどお待ちください」

「はあ」

——この人で、本当に大丈夫かしら。

無防備なまま大の字でその場に寝込む洋介を見て不安を覚えた。

この絵面では、しょうがない気がしないでもないのだが。

それから、きつちり十分後。

”放熱”を終えた洋介はバイクの座席に軽く座り、

そうして出来た余ったスペースに女性を乗せ、荒れ地の中を走り去って行った。

（パイロット版）第一話：「人類消滅」（後書き）

自分でも書いててなんだかよく分からなくなりました。

「ヒーロー作品における一般人ってさ、

いつつも理由なく暗黙の了解で守られてっけど、

一般人だって怪人以上にひどいときだってあるんじゃない？

そういうのが全然おとがめなしなのってなんだかおかしくね？」

というガキ臭い疑問から作品の設定を組んでいったら、

いつの間にかこんなものになっていました。

（実質）制作期間二日の突貫工事モノです。

パイロット版で、どんなライダーなのかを説明しなきゃならなくて、主人公の台詞が長い長い。こんなに一人語りしていいのかよと。

とりあえず、八九寺さんの年齢は30代後半で40台に行きそうだとか、

それぐらいの年齢の人だとも思っていてください。

イケメンかどうかは知りません。考えていません。

もしかしてまた続くようでしたらお付き合いくださいませ。

これが丸々書き直されるか、この続きが追加されるかのどちらか、ですが。

とりあえず頭の中にあつた設定とか（前書き）

（主に自分が）読んでて意味不明だった設定とかその他をここにで。

とりあえず頭の中にあつた設定とか

世界観

『ゼノニウム・フレア』によつて人類の大半が焼失したのが2020年。

物語の舞台は2025年以降。

大型核施設保有国はほとんどの国土を失う大惨事。

（本当にそんな核爆発が起きたら地球が危ない！
とかいう研究結果が出てるけど、そこはあえてキニシナイ）

中国とかアメリカとか中東とかフランスとか、デカイところは結構ヤバい。

特に中国とかは国土の大半が消失済み。

かつて『仮面ライダー』が放送されていた世界。

人間

核爆発で死んだ人間以外は、『ゼノニウム・フレア』による副作用によつて、

”人間以外の何か”と融合してしまい、”純粋な人間”が『存在しない』。

ついでに、”人と融合していない”動植物も『存在しない』。

動物と融合した人間は、個々の動物が持つ力を格段に高めて扱えるものの、

融合した動物に”意識”や”本能”を乗っ取られるリスクを持つ。

怪人

発端や形態は上の項参照。

後々使うかどうかは微妙なれど、便宜上『ミュートス』とでも呼んでおく。

ヒツジっぽいのが『シーピン・ミュートス』。

集団で襲ってきた犬が『ウオードッグ・ミュートス』。

ついでに八九寺洋介が『アーピス・ミュートス』。

仮面ライダーバグロス

”ミツバチ”を模した仮面ライダー。

（スズメバチだとスーパー1とかザビーとか競合相手が強すぎるから）

科学者・八九寺洋介はちくじ ようすけのオーダーメイド。

体中に、動植物の致死レベルに相当するほどの高熱を蓄積させることができ、

それを放出することで、他の生き物を”内部から壊死させる”。

（熱を溜め込む能力は”ミツバチ人間”だからこそその芸当であるが、

そうした能力を攻撃に転用できるのはライダーの力があってこそ）

パンチ力：60 kg、9 t
キック力：80 kg、12 t

・八九寺 洋介

科学者（物理とか工学系統の）。

年齢は三十台後半かそれよりもちよっと上。

格闘技は柔道と空手をそこそこ。

趣味はテレビに合わせて変身ポーズを取ること。

色々と考えてはいるのですが、

バラすとあとあと面倒になりそうなのでここいらでストップ。

レギュラーはもう一人ぐらいは増やすつもりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1052m/>

仮面ライダーバグロス

2010年10月9日04時15分発行